

・総合理学研究科生体超分子システム科学専攻の設置／鶴見キャンパスの設置（平成13＝2001年）

1. 上記の出来事について、その経緯や当時の大学の状況はどのようなものでしたか。1989年に横浜市立大学大学院総合理学研究科が新しい理念の大学院として高杉教授、小島教授、馬来教授らを中心に設置され、私は大学院専任として着任し、500MHzのNMR装置の導入など多大の便宜を図って戴いた。発足当時から高杉先生や小島先生は学部とは別の大学院が独立した建物の構想を話されていた。1994～1998年度重点研究：蛋白質の高次構造に基づくシグナル認識機構の解明（代表：西村 善文）が発足し新たにタンパク質構造解析用に600MHzと500MHzのNMR装置が横浜市大に整備されることになり、八景キャンパスのボイラー室をNMR棟に改装して頂いた。その際、大学事務からの要望でNMRの研究を横浜市へ還元しアピールするために「よこはまNMR構造生物学研究会」を平成7年6月20日（1995年）発足した。発起人は西村善文（横浜市大）、阿久津秀雄（横浜国大）、鈴木榮一郎（味の素）、好田真由美（協和発酵）である。

平成7年8月14日に特別講演会「DNA産業と構造生物学」を開催した。内容は「はじめに：西村善文（横浜市大）、DNA産業の展望：湯元昇（通産省）、欧米におけるDNA産業の現状：大滝義博（合同ファイナンス）、生命工研での構造生物学の展望：鈴木理（生命工研）、NMRによる構造生物学の展望：横山茂之（東大）、BERIにおける構造生物学の展望：森川耿右（生物分子工研）、終りに：阿久津秀雄（横浜国大）」である。その時に初めて公に横山氏から理研のNMRパーク構想（網羅的タンパク質構造解析用の多数のNMR装置整備）が発表された。また同じころ理研のゲノム科学総合研究センターが構想され1995年（平成7年）11月28日に航空・電子等技術審議会に諮問第22号「構造生物学に関する総合的な研究開発の推進方策について」が諮問された。構造生物学分科会（主査：和田昭允）において検討が進められ、1996年（平成8年）7月11日に開催された航空・電子等技術審議会総会において審議、了承され、中川秀直科学技術庁長官に答申された。その後ゲノム科学に関する長期的な考え方が1998年（平成10年）6月29日に科学技術会議ライフサイエンス部会ゲノム科学委員会で承認された。

その間、理研ではセンター設置場所が検討され、兵庫県の播磨や埼玉県の鶴ヶ島等の候補が上がっていた。その中で個人的な知人で当時の理研の主任会メンバーの柴田武彦博士から横浜の可能性の打診があった。当時の理学部長小島先生に相談したところ京浜臨海部再編整備として「横浜サイエンスフロンティア」を計画中だった横浜市企画局の金近忠彦氏を紹介して頂き横浜市も誘致に乗り出した。幸か不幸か当時の横浜市の主たる政策目標の横浜オリンピック構想（2008年夏季オリンピックの開催を横浜市の横浜総合国際競技場をメインとしていた構想）は1997年の日本オリンピック委員会総会での決選投票により日本からの立候補都市は大阪市に決定した。横浜市の大型政策としては理研の誘致が残り、理研の誘致活動が本格化し、理研と同じキャンパスに横浜市大を設置する構想が浮上り、横浜市大鶴見キャンパス構想ができた。

理研の柴田博士と密接に合議して理研と横浜市大の完全な対等の連携大学院構想を作成した。またオリンピック担当の事務を行っていた牧野和敏氏が横浜市大の事務に来て、理研との連携大学院構想を具体化した。2001年に生体超分子システム科学専攻が発足したがその趣旨は分野の集中と分野内競争（切磋琢磨）である。鶴見キャンパスの教員として6部門（教授、助教授、助手各1）理研教員として5部門の構成で、構造生物学を主として情

報生物学やゲノム科学の研究者が集まった。横浜市大側の人選には当時大阪大学蛋白研所長の京極先生やタンパク工学研の部長の森川博士の助言を戴いた。

2. 上記の出来事を進められる上で、特に印象に残ってらっしゃること（良いこと・悪いことどちらでも）はどのようなことですか。ご苦労されたこと等についてもご記載ください。

全く新しい構造生物学に特化した専攻を作るという事で多くの若い先生方が参加したが、設置審の評価（いわゆる丸合、合等）を受ける必要があった。分野からは融合領域だが化学が近いだろうという事で化学の設置審の意見を内々に聞いたところ、化学の設置審として研究内容は良いとしてもそれまで評価してきたことに対する無謬（むびゅう）性の原則があり、化学の分野で30代の教授や助教授（若いから論文数は10報程度）は困難であると指摘された。化学では当時暗黙に30代で助手、40代で助教授、50代で教授、論文数は年齢と同じくらいという雰囲気があったようである。それで生物の専門委員の意見を複数聞くことになったが、生物では分野の革新が生じていて、新しい分野を積極的に評価するという雰囲気があり、かえって内容を羨ましがれ、ぜひ頑張ってもらいたいと評価して頂いた。新しい分野だから研究者も若くて、当然若いからから内容が良ければ論文発表数が少ないことも問題にならないと話される先生がいてほっとした。この過程で北大や東大や京大の色々な先生方を巡ったのは非常に興味深いことで、また無謬性の原則という言葉が鮮明に覚えている。結果的に発足した生体超分子システム科学専攻の市大や理研の全教員の専門職は生物であるという事は、当時の八景キャンパスの生物の先生方は殆ど知らないことだと思う。その時同行した事務方の伊藤さんには大変お世話になった。

2. 上記の出来事による、その後の本学への影響・効果はどのようなものとお考えですか。

市の理研誘致の一環として鶴見キャンパスが設置されたのは市大の発展の一つの引き金になったと思われる。また、市として積極的に鶴見キャンパスを整備した経緯があるだけに、地域貢献も鶴見キャンパスで積極的に行うことになった。横浜市地域結集型共同研究事業（2000-2004年度 事業総括：山本康（元キリンビール副社長）、研究統括：西村善文）、都市エリア産学官連携促進事業（2005-2007年度 事業総括：山本康、研究統括：西村善文）に引き継がれた。その後に医学部を中心とした先端融合領域イノベーション創出拠点（翻訳後修飾プロテオミクス医療研究拠点の形成 2009-2018 代表：平野久）に続き更に先端医科学研究センターに引きつがれた。

京浜臨海部再編整備事業としては、発足当時は鶴見駅からキャンパスまでのバス（ふれ一ゆ行）はそれほど混んでなくまた昼間のバスの運行もまばらであったが、鶴見キャンパスの整備が進むとともに、バスが非常に混んできた。特にキャンパスから更に終点の方まで多くの人が活動している現状である。バスも頻繁に出るようになったが、朝夕の混んでいるときにはバスを数台待つ必要がある。特に夕方は理研市大大学院前のバス亭で待っていると満員状態になったバスが数台通過する事がある現状は京浜臨海部が過疎化するのと逆行して過密になってきた現状を反映し、鶴見キャンパスの整備が付近の再発展の契機になったのは間違いないと思われる。また、キャンパスが発足したころは鶴見駅西口は古くからの住宅街があつてにぎやかであったが、東口は京浜臨海工業側という事もあつてうらさびれた感があつたが、今は東京への通勤住宅街としても発展し東口が非常にきれいに

整備されにぎやかになった。以前は横浜市鶴見区はイメージが良くなかったかもしれないが、鶴見キャンパスに研究拠点ができたことなどからイメージが非常に高くなったと思われる。

また国の大型プロジェクトとして横浜市大鶴見キャンパスではタンパク 3000 プロジェクト (2002-2006 年度)、ターゲットタンパク研究プログラム(2007-2011 年度)、創薬等支援技術基盤プラットフォーム解析拠点 (2012-2016 年度:平成 24-28 年度)、創薬等ライフサイエンス研究支援基盤事業(BINDS、2017-2021 年度:平成 29-令和 3 年度)を行ってきた。BINDS 事業は更に第 2 期 (2022-) に続いている。また 2004 年(平成 16 年)8 月製薬協の蛋白質構造解析コンソーシアム (蛋白コンソ) と包括的基本協定を締結した。また 2006 年(平成 18 年)4 月から蛋白コンソに対し、フロー型クライオプローブ付 700MHz NMR 装置の有償利用を開始した。そのような背景で文科省の先端研究施設共用イノベーション創出事業(2007-2009 年度)を開始した。引き続き 700MHz の他 900MHz NMR 装置の共用利用も開始し先端研究施設共用促進事業 (2009-2011 年度) 及び NMR 共用プラットフォーム事業 (NMR-PF、2012-2014 年度) として蛋白コンソ加盟企業以外にも 700MHz、900MHz NMR 装置を公開する事になった。更に NMR-PF は続いている (2015-2020 年度及び 2021 年以降) が、その間、NMR の公開利用の成果を評価され 950MHz (LC-NMR 付属装置、超高速 MAS 固体付属装置) 装置を文科省の援助で導入し、多くの企業で利用されている。但し企業利用は成果占有有償利用が多くアカデミアでは成果公開無償利用が多い現状である。

4. 本学の特色、良いと思われる部分、または気になる部分をご記載ください。

大学や市の本庁の事務方には非常にお世話になった。大学にも何人かのやる気の教員がいて、その人達は陰に陽にサポートしてくれた。大きな組織では足を引っ張る人も出てくるかと思うが、特にそのような目には合っていない。あるとき大学の事務の人が言っていたのは横浜市の官僚は一流の地方公務員であるといっていたが、その様な自負や気概のある事務方に恵まれたのは非常に大きいと思う。

5. その他、上記の出来事や本学のことについて、ご自由にご記載ください。

横浜市の京浜臨海部の再編整備の施策の中で、鶴見キャンパスは設置され、それなりの貢献はできたと思う。但し、最初は付近には広大な空き地ができ、理研の要望にもどんどん答えることが可能といっていたのが、付近の企業群が特に去らず、また企業等が研究業務などを充実させたため空き地が出来ず、横浜における理研の発展に応えることが結局できにくくなったのは残念な事の一つである。理研のスパコンセンターも横浜市ではなく神戸市に設置され、また一時国立衛生試験所が世田谷から移転するときの候補に横浜市も上がったが結局川崎市の殿町に移転した。今や川崎市が中心になって殿町の羽田沖に研究拠点を整備しているのは、折角京浜臨海部の発展の先鞭を横浜市が付けたのに残念でもある。

その為にも将来計画として今後開設される市民病院付医学部根岸キャンパスも含めた市大キャンパス間を結ぶモノレール (新都市交通システム) の延伸が強く望まれます。例えば、起点を羽田空港として、殿町、鶴見キャンパス、八景キャンパス、根岸キャンパス、終点を藤沢の武田の湘南アイパークにする等のアイデアが考えられます。

・生命医科学研究科設置 (平成 25=2013 年)

1. 上記の出来事について、その経緯や当時の大学の状況はどのようなものでしたか。

鶴見キャンパスができて理研との連携大学院が成果を上げるにつれ、理研のセンターとの連携や共同研究を遂行するためにも副学長の五島先生を中心に医理連携という構想がうたわれるようになった。医学部のメインキャンパスである福浦と鶴見は場所的に離れていて、しかも理研の多くの先生方は東京やあるいは埼玉から通われていたので、鶴見は東京に一番近い横浜市だが福浦が一番遠い横浜市という印象であった。交通的には鶴見と福浦の交流は非常に不便でもあったので鶴見キャンパスでは医学部との連携は消極的であった。当時研究推進にいた事務の奥田さんに相談すると五島副学長が強く医理連携を推進していて、しかも鶴見キャンパスが医学部との連携に消極的だという印象があるので、まずは相手の土俵に乗った方が良いという事であった。五島先生と連携構想を協議した。鶴見キャンパスでは医学部の事は殆ど分からなかったもので、連携の概要はまずは五島先生が案を作成した。最初はバーチャルに福浦キャンパスと鶴見キャンパスの連携で案を作成していたが、当時の本田理事長にお見せすると、見かけだけではなく実態も連携するようにと強く指示された。また医理連携としては、距離的に近い福浦キャンパスと八景キャンパスでも話が進行していたようなので、鶴見キャンパスと福浦キャンパス間でも強固な連携の実態を求められた。その結果、医学部からの先生が鶴見キャンパスに実質的に参加する案になり、五島先生が医学部の教員案を纏められた。

2. 上記の出来事を進められる上で、特に印象に残ってらっしゃること（良いこと・悪いことどちらでも）はどのようなことですか。ご苦労されたこと等についてもご記載ください。

殆ど五島先生の案を基に本田理事長からの強い指導で連携の中身が決まっていたが、医学部から来た先生方の中には、むしろ鶴見キャンパスの先生方の意見で構想がまとまったと思っている先生もいて誤解を解くのに大変苦労した。

3. 上記の出来事による、その後の本学への影響・効果はどのようなものとお考えですか。

少なくとも鶴見キャンパスにいた平野先生は先端融合領域イノベーション創出拠点の形成（翻訳後修飾プロテオミクス医療研究拠点の形成 2009-2018）の代表を務め、その後で先端医科学研究センターに引きつがれる契機になったので結果的には市大全体の発展に寄与できたと思う。ただし、やはりキャンパス間の距離の問題は大きく、実質的な連携は結果的には困難であった。

4. 本学の特色、良いと思われる部分、または気になる部分をご記載ください。

当時の理事長の強い指導の下に連携ができた。また五島先生は医理連携に強い思いがありその強い意志で医学部内を纏められたような気がする。やはり横浜市の最東部の鶴見キャンパスと最南部の福浦キャンパスの距離の問題は非常に大きく、キャンパスが分散していることが横浜市大の弱点だろう。但し、各々のキャンパスができた経緯は横浜市の施策の中の問題でもあるので、今後キャンパス分散の問題が解決するとも思えない。むしろ横浜市大の最大の特徴は各キャンパスの高次の独自性にあるといっても良いかもしれない。

5. その他、上記の出来事や本学のことについて、ご自由にご記載ください。

前出とほとんど同じである。